2018 夏休みすいせん図書
～本の森へ～

西東京市図書館

1・2年生

「そして、トンキーもしんだ」　たなべまもる ぶん　かじあゆた え／国土社

もう、なん年もなん年もまえのおはなしです。うえのどうぶつえんの三とうのぞうは、とてもにんきものでした。しかし、せんそうがながびくうちに、どうぶつたちのえさがたりなくなってしまい、ぞうたちをころさなければならなくなりました。

「ネルはいぬのめいたんてい」

ジュリア・ドナルドソン ぶん　サラ・オギルヴィー え　福本友美子 やく／ＢＬ出版

ネルは、はながよくきくいぬのめいたんてい。どんなじけんも、たちまちかいけつ。ネルがだいすきなのは、ほんのにおい。げつようびは、かいぬしのピーターとがっこうにほんをよみにいく。ところがあるひ、きょうしつのほんがぜんぶなくなった。くん、くん！たいへん、これはじけんだ！

「せかいいちおいしいスープ」　マーシャ・ブラウン 文・絵　こみやゆう 訳／岩波書店

はらぺこの３にんのへいたいは、あるむらで、たべものをわけてほしいとたのみました。でも、むらびとたちにはことわられてばかり。そこでへいたいたちは、いしのスープをつくるといいだしました。それをきいたむらびとたちはびっくり。いったい、どんなあじがするのでしょう？フランスの民話をもとにしたゆかいな絵本です。

「ひっこしをした かばのこカバオ」　森山京 作　木村かほる 絵／風濤社

かばのこのカバオは、遠くの町へひっこしすることになりました。なかよしのぶたくんや、くまくんたちとおわかれすることがかなしくて、ないてしまうカバオ。でもみんなはさいごに、すてきな歌のプレゼントをくれました。

さて、あたらしい町では、カバオにどんなであいがまっているでしょうか。

「サイアク!」　花田鳩子 作　藤原ヒロコ 絵／ＰＨＰ研究所

春休みがおわって今日から三年生になったあたし。クラスがえでなかよしの、みきちゃんは二組、あたしは一組。べつべつのクラスになってしまってがっかり。

みきちゃんは同じクラスになったユカちゃんといつもいっしょにいて、あたしとあそばなくなった。クラスがかわっても、なかよしだと思っていたのに。

「たんけんクラブ シークレット・スリー」

ミルドレッド・マイリック ぶん　小宮由 やく　アーノルド・ローベル え／大日本図書

うみべにすむビリーのいえに、マークがとまりにきました。ふたりがすなはまにむかうと、みどりいろのビンがおちていました。中にはいっていたのはてがみでしたが、さかさまにしてみたり、右や左にまわしてみたりしても、よめません。あんごうのようです。いっしょになぞをといてみましょう。

「イースターのたまごの木」　キャサリン・ミルハウス 作・絵　福本友美子 訳／徳間書店

キリスト教で、春をいわうおまつり「イースター」。

イースターの日、ケイティとカール、そしていとこたちは、おばあちゃんのいえで、イースターうさぎがかくした、たまごさがしをはじめます。

たのしい「イースター」の日のことがよくわかる、とても古いおはなしです。

「てのひらかいじゅう」　松橋利光 しゃしんとぶん／そうえん社

うちのにわであるひ、すごいいきものをみつけたよ。それは、「てのひらかいじゅう」。するどいめでこちらをみながら、したをぺろり。おおきなくちをあけると、まるでかいじゅうみたい。でも、ほんとうは…ちいさなとかげのなかま、「カナヘビ」だよ。ふしぎな「てのひらかいじゅう」。きみのちかくにも、もしかしたら「てのひらかいじゅう」がいるかも?!

3・4年生

「ぼくの先生は東京湾」　中村征夫 写真・文／フレーベル館

多くの人たちがくらす町、東京。そのすぐ近くに広がるのが東京湾です。その海の中をのぞいてみるとたくさんの生きものたちがくらしています。わたしたち人間も東京湾から多くの命をもらっています。この本を読むと、東京湾のことがよくわかり、人間もまた、自然のなかで生きるひとつの生きものだということがわかります。

「すばこ」　キム・ファン 文　イ・スンウォン 絵／ほるぷ出版

すばこは、ひとがつくった鳥の家です。さいしょは、鳥のひなをつかまえるわなでした。鳥の家としてすばこがつくられるようになったのは、いまから100年ほどまえのことでした。鳥がだいすきなドイツのベルレプシュだんしゃくというひとが鳥たちがあんしんして子そだてができるように、すばこをつくったのです。すばこのことがわかる絵本です。

「この本をかくして」　マーガレット・ワイルド 文　フレヤ・ブラックウッド 絵　アーサー・ビナード 訳／岩崎書店

てきの飛行機がおとしたばくだんが図書館にあたって、本はたった一冊をのこしてみんなもえてしまった。のこったのは、ピーターのおとうさんがかりてだいじによんでいた本。まちをでていかなければならなくなったとき、おとうさんはその本を宝ものだといって、てつの箱にいれた。ピーターはその宝ものをかならずまもることを、おとうさんにやくそくした。

「キワさんのたまご」　宇佐美牧子 作　藤原ヒロコ 絵／ポプラ社

夏休みのはじめ、甘楽サトシは、父さんといっしょに農家に野菜を見に行った。そこで、となりのキワさんというおばあさんの、まぼろしのたまごの話を聞いたサトシは、弁当屋をしている両親のために、たまご焼きづくりを計画する。次の日、キワさんの家に行くサトシだったが、たまごを手に入れるには、条件があった。サトシ、キワさん、そしてニワトリとの関係が楽しいお話です。

「なみきビブリオバトル・ストーリー　－本と4人の深呼吸－」

赤羽じゅんこ 作　松本聰美 作　おおぎやなぎちか 作　森川成美 作　黒須高嶺 絵／さ・え・ら書房

「ビブリオバトル、やりませんか？」そんな図書館のポスターにひかれ、並木図書館には、佐藤修他３人の小学生が集まりました。ビブリオバトルとは、本を紹介しあうゲームです。図書館の司書にアドバイスをもらいながら、４人はそれぞれ、自分の好きな本を選んできました。さあ、ビブリオバトルのはじまりです。

「黒ネコジェニーのおはなし１　ジェニーとキャットクラブ」

エスター・アベリル 作・絵　松岡享子・張替恵子 共訳／福音館書店

赤いマフラーのにあう小さな黒ネコのジェニー・リンスキーは、ネコのあつまり「キャット・クラブ」にはいるため、なにかとくぎをみつけようとします。スケートをして、クラブのみんなにみせることにしました。はにかみやでひっこみじあんだけど、やるときはやるジェニーのゆかいなおはなしが３つはいっています。

「アルバートさんと赤ちゃんアザラシ」　ジュディス・カー 作・絵　三原泉 訳／徳間書店

自分の店を売り、やりたいこともなく、なんだか毎日がつまらないアルバートさん。そんなある日、海で野生のアザラシの親子に出会ったアルバートさんは、かわいい赤ちゃんアザラシにひかれます。ところが、母親アザラシが漁師に銃でうたれて死んでしまいました。弱っていく赤ちゃんアザラシを助けるために、アルバートさんは自分がつれて帰り、町の動物園に引きとってもらおうとします。実話をもとにしたお話です。

「プランクトンのえほん　ミジンコ」　吉田丈人 監修／ほるぷ出版

ミジンコは、たんぼやいけなどで見ることができます。ミジンコの体長は１～３ミリメートルぐらい、からだの色はとうめい、スイッ、スイッとすばやくおよぎます。心臓は１分間に200回うごきます。さあ、こんなにちいさなミジンコ、どんないきものなのかな。ほかに、「ゾウリムシ」「植物プランクトン」の2さつがあります。

5・6年生

「発明家になった女の子マッティ」エミリー・アーノルド・マッカリー 作　宮坂宏美 訳／光村教育図書

マッティは発明が大好きな女の子。「発明ノート」に思いついたものをスケッチし、亡くなったお父さんの工具を使っていろいろなものをつくります。お母さんには足をあたためる道具、お兄さんたちには風車や人形をつくってあげました。やがて大人になったマッティは紙袋の工場で働きはじめ、新しい紙袋製造機の発明に挑戦します。19世紀末にアメリカで活躍したマーガレット・E・ナイトの物語。

「もしも地球がひとつのリンゴだったら」デビッド・J.スミス 文　スティーブ・アダムス 絵　千葉茂樹 訳／小峰書店

もしも地球を、ひとつのりんごとしたら、4分の3は水（海や氷山などの氷、湖や川）、残りの4分の1が陸です。その陸の半分つまり、りんごの8分の1に人間がくらせる土地があります。では、地球の歴史を1年間にちぢめたら？世界中のエネルギー資源を、100個の電球であらわしたら？

大きすぎたり、古すぎたりしてよくわからないことも、少し見えてくるでしょう。

「靴屋のタスケさん」　角野栄子 作　森環 絵／偕成社

時計屋さんが越して、からっぽになったお店。そのお店にかんばんがついた。「タスケ靴店　お靴を直したり、作ったりします」。お店のなかにいれてもらったわたしは、タスケさんの仕事を見たり、話したりするうちに、自分も赤い靴を作ってもらいたくなった。でも、できあがった靴をはいたのは1度だけ。タスケさんは兵隊へ、わたしの靴は空襲で焼けてしまった。最後がふしぎなお話です。

「チキン！」　いとうみく 作　こがしわかおり 絵／文研出版

ぼくのクラスに転校生の真中さんがやってきた。まちがったことがゆるせないタイプの真中さんは、クラスでトラブルを起こしてばかり。だって、みんなまちがいをがまんして毎日過ごしているんだ。面倒なことは避けてきたぼくの毎日は、真中さんに出会ってとつぜん変わってしまった。

「ぼくたち負け組クラブ」　アンドリュー・クレメンツ 著　田中奈津子 訳／講談社

アレックは、本を読むことが大好きな6年生です。両親の帰りがおそいため、「放課後プログラム」に登録しました。ここでは、いつでも好きなクラブに参加することができますが、アレックが大好きな本を読むことができるクラブはありません。そこで、アレックは本を読むことができる「負け組クラブ」を作りました。

『グレッグのダメ日記』や『ハリー・ポッター』など、たくさんの本が出てきます。

「空飛ぶリスとひねくれ屋のフローラ」ケイト・ディカミロ 作　斎藤倫子 訳　K・G・キャンベル 絵／徳間書店

自分のことを「ひねくれ屋」と言う十歳のフローラは、作家の母さんとふたりぐらし。ある日、フローラはおとなりのティッカムさんの裏庭で、掃除機にすいこまれかけていたリスを助けた。だけど、なんだかリスのようすが変。片手で掃除機を持ちあげ、人間の言葉もわかる。タイプライターを打つし、空も飛べる！フローラはそのリスにユリシーズと名づけ、観察することにした。

「ここで土になる」　大西暢夫 著／アリス館

熊本県五木村の大イチョウは、何百年も前から村の風景を見守ってきました。美しい川や山、人々のにぎやかなわらい声、子どもたちが遊ぶ様子がそこにはありました。でもある時、ダムを造る計画によって人々は村を出て行きました。村にたった二人のこった尾方さん夫婦と、大イチョウの暮らしを写真でつづったお話です。

「髪がつなぐ物語」　別司芳子 著／文研出版

「ヘアドネーション」ということばをきいたことがありますか？長くのばした自分の髪を寄付することです。髪は、ていねいに処理をされて「医療用ウィッグ」として、病気やその治療によって髪を失ってしまった子どもたちのために使われます。ボランティアとして参加した子どもたち、ウィッグを受け取る子どもたちの視点を通して活動を紹介します。